

「子育て家族の生活と学童保育に関する調査
研究」報告書

2023 年 4 月

北翔大学短期大学部 こども学科
准教授 保田 真希

目次

はじめに	2
1.研究目的.....	2
2.研究手法.....	2
3.倫理的配慮	3
I. 小学校利用家族へのアンケート調査から	3
1.江別市内の小学校を利用している家族への調査	3
2.学校への要望	10
II. 市への要望	11
III. 調査のまとめ.....	13
謝辞.....	13

はじめに

1. 研究目的

本研究の目的は、江別市で子育てをしている家族へのアンケート調査を行い、①子育て家族の生活構造やそこに生じる困難の構造、②学童保育の利用状況などを明らかにし、女性の貧困やDV、虐待問題、孤立した子育ての予防策を前進させることである。

より具体的には、新型コロナウイルス感染症は子育て家族の生活にどのような影響を及ぼしたのか、子育て家族の生活構造やケアの実際とサポートや悩みの特徴を明らかにする。

研究の背景となる江別市の地域の課題には、女性の非正規雇用率の高さがある。令和3年度の研究希望内容報告書にも記載されていたが、女性は、出産・子育てを機に仕事を離れると復帰する際に非正規雇用になることが多く、ベッドタウンである江別市は近隣市に比べ、女性の正規雇用率が低い。申請者が令和3年度江別市大学連携補助金を受けて実施した就学前の子を育てる家族へのアンケート調査の結果においても、男性は働き方などに変化が無い一方で、女性は結婚・妊娠・出産・育児などのライフイベントや、パートナーの転勤・転職を機に離職を経験し、専業主婦や非正規雇用で働く割合が高かった。また、コロナ禍で誰からもサポートを得られていない家族が約3割いたことから、育児と仕事の両立を可能にするためには、どのような支援が必要なのか、家族や友人などの周りのサポートの実態などを明らかにする必要がある。

2. 研究の手法

江別市で就学した子を育てる家族の生活構造やケアの実際と、サポート(職場、友人、親など)や悩みの特徴等を明らかにするため、就学した子をもつ家族を対象に下記の3つのアンケート調査を実施した(図表1)。

調査項目は、①本人や家族(家族構成や出身地、居住、通院や訓練機関の有無、介助が必要な家族の有無、最終学歴や資格、職歴等)②普段の子育て(現在に至るまでの家族内のケアの配分とサポート、悩みと相談相手等)、③利用状況、④利用機関や市への要望等である。

図表1 調査の実施状況

調査対象	調査時期	回答者数
1.小学校17ヶ所	2023年2月～3月	592名
2.放課後児童クラブ(25ヶ所)および児童センター(7か所)	2023年2月～3月	98名
3.中学校 公立8か所	2023年2月～3月	145名

3. 倫理的配慮

本研究は北翔大学大学院・北翔大学・北翔大学短期大学部研究倫理審査で承認されたものである。江別市で子育てをしている家族に対し、各園・機関を通じて、調査の趣旨や概要、断ってもよいこと、データの取り扱い方法などを記載した依頼文を配布した。協力が得られる場合は、依頼文に記載したQRコードを読み取り、WEB上でアンケートに回答してもらう形で実施した。その際、全て無記名で、メールアドレスも回収しない形にし、協力者の匿名性の保障と個人情報の保護を行った。

I. 小学校を利用している家族へのアンケート調査から

本章では、小学校 17 ヶ所を利用している家族に実施したアンケート調査の結果を中心に整理していく。

1. 小学校を利用している家族への調査

(1) 調査の概要

江別市役所および教育委員会ならびに校長・教頭をはじめ教職員のご協力を得て、2023 年 2 月～2023 年 3 月までの 1 ケ月間に江別市内の小学校 17 ヶ所を利用しているご家族に対して、各学校を通じて、調査の趣旨や QR コードを記載した依頼文を配布し、アンケート調査を実施した。本調査は、QR コード読み取りによるアンケート調査である。その結果、回答が得られたのは、592 名である。本章では、世帯の状況、部活動や習い事、仕事、サポート、つながり、園や市への要望を中心に結果を整理していく。

(2) 世帯の状況

1) 回答者

回答者は「母親」が 564 名 (95. 3%) で最も多い。家族形態は「両親世帯」が約 8 割を占めていた。

図表 2 家族形態別にみる回答者

N=592 (単位：人)

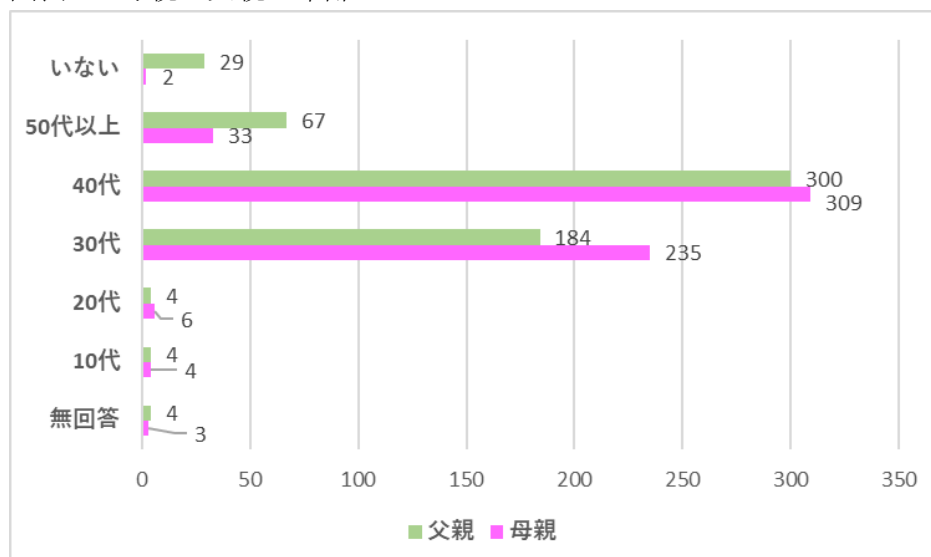
		家族形態								合計
回答者		両親世帯	祖父母同居の両親世帯	父子世帯	祖父母同居の父子世帯	母子世帯	祖父母同居の母子世帯	その他	無回答	
	無回答	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	祖母	0	0	0	1	0	0	3	0	4
	父親	20	2	1	0	0	0	0	0	23
	母親	479	43	0	0	31	8	2	1	564

2) 母親と父親の年齢

母親と父親の年齢はどちらも「40 代」が最も多い(図表 3)。

図表 3 母親と父親の年齢

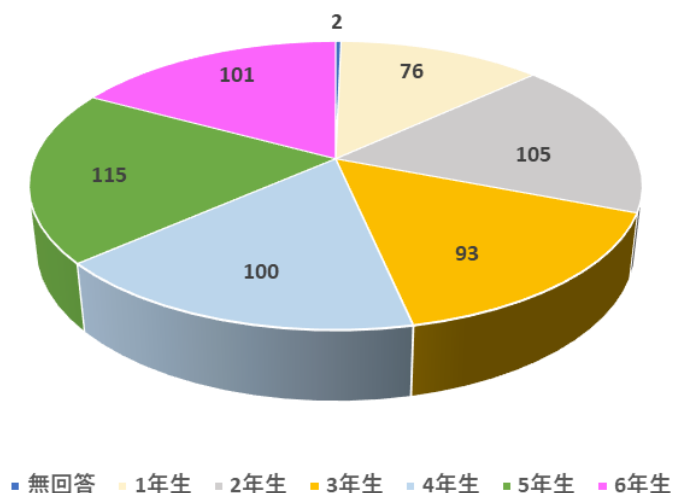
N=592



3) アンケートの対象になっている子の学年

子の学年については「5年生」が115名(19.4%)で最も多い。次いで、「6年生」が101名(17.1%)、「4年生」が100名(16.9%)である。どの学年も同程度の回答が得られている。

図表4 アンケートの対象になっている子の学年 N=592



(3) 部活動や習い事・教育費

1) 部活動と1年間の費用

部活動については、「していない」が426名(81.6%)で最も多い。次いで、「市内の少年団・チーム」が125名(23.9%)、「学校の部活動・クラブ」が23名、「江別市外の少年団・チーム」が13名(2.5%)である。

また1年間にかかる部活動の費用(自由回答)については、最も高いもので「30万円以上」であるが、平均的に約10万円であった。

2) 習い事と1年間の費用

部活動の他の習い事については、「していない」が162名(27.4%)で最も多い。次いで、「水泳」が66名(11.1%)、「通信教育(進研ゼミやZ会など)」が65名(11.0%)、「音楽」が64名(10.8%)、「学習塾」が52名(10.0%)、「英会話などの語学」が49名(8.3%)、「プログラミング」が8名(1.4%)である。

3) 教育費

教育費については、「適当な金額」が306名(51.7%)、「高い」が261名(44.1%)、「安い」が13名(2.2%)であった。

1年間に習い事や教材費などの子どもにかかる金額については、「1万円未満」が約4割で最も多い。次いで、「1万円程度」が約3割、「3万円」「2万円」がそれぞれ約1割を占めていた。最高額については、35万円であった。

(4) 仕事

1) 現在の仕事と年収

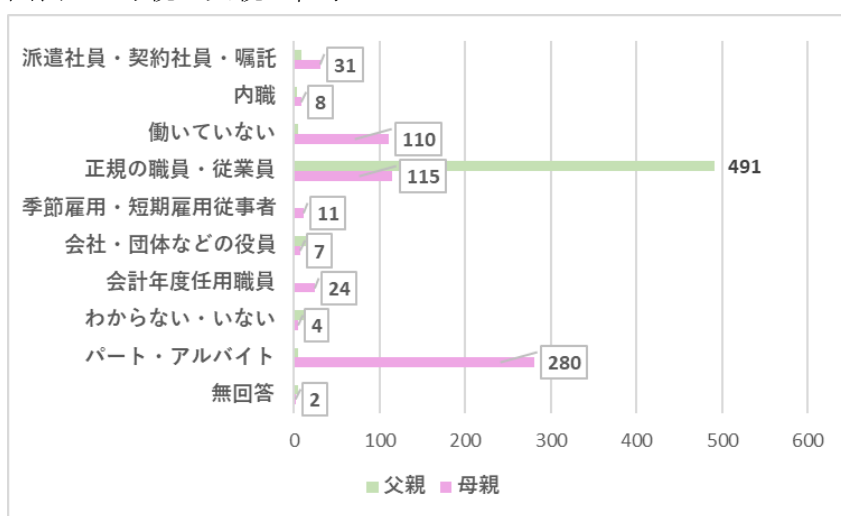
母親の仕事を見ていくと、母親は「パート・アルバイト」が280名(47.3%)で最も多く占めている。次いで「正規の職員・従業員」が115名(19.4%)、「働いていない」が115名(18.6%)である。「派遣社員・契約社員・嘱託」が31名(5.2%)、「会計年度任用職員」が24名(4.1%)、「季節雇用・短期雇用従事者」が11名(1.9%)、「内職」が8名(1.4%)である。

派遣社員の人数を合わせると、母親の約半数が非正規雇用に従事している(図表 5)。年収についても、扶養の範囲内で働いていた。

一方で、父親は「正規の職員・従業員」が 491 名(82.9%)で最も多い。次いで、「会社・団体などの役員」が 37 名(6.3%)である(図表 5)。「派遣社員・契約社員・嘱託」が 8 名(1.4%)、「パート・アルバイト」が 4 名(0.7%)、「派遣社員・契約社員・嘱託」が 8 名(1.4%)、「季節雇用・短期雇用従事者」が 1 名(0.2%)である。このように、男女で働き方に偏りが生じていた。

次に職種について見ていく。母親の職種を見ると、「専門・技術歴職業」が 195 名(32.9%)、「事務職」が 123 名(20.8%)であった。一方で、父親の職種は「専門・技術的職業」が 127 名(21.5%)で最も多い。次いで「営業・販売職」が 74 名(14.0%)、「事務職」が 67 名(12.7%)、「管理的職業」が 61 名(11.5%)、「建設・発掘従事者」が 56 名(10.6%)、「保安的職業」が 52 名(9.8%)である。

図表 5 母親と父親の仕事 N=592



2) 職場で取得できる有給休暇の日数と休みやすさ

次に、職場で取得できる有給休暇の日数について整理していく。母親の職場で取得できる有給休暇の日数をみると、「ない」が 128 名(21.6%)で最も多い。次いで、「無回答・非該当」を除くと、「10 日以上 20 日未満」が 122 名(20.6%)、「5 日以上 10 日未満」が 112 名(18.9%)で多い。

一方で、父親の職場で取得できる有給休暇の日数を見ると、「20 日以上」が 190 名(32.1%)で最も多い。次いで、「10 日以上 20 日未満」が 149 名(25.2%)、「5 日以上 10 日未満」が 99 名(16.7%)である。また、母親のほうが比較的、休みを取りやすい(図表 7)。

図表 6 職場で取得できる有給休暇の日数

	母親	父親
無回答・非該当	121	66
ない	128	77
1日	5	0
2日	3	1
3日	10	7
4日	4	3
5日以上10日未満	112	99
10日以上20日未満	122	149
20日以上	87	190

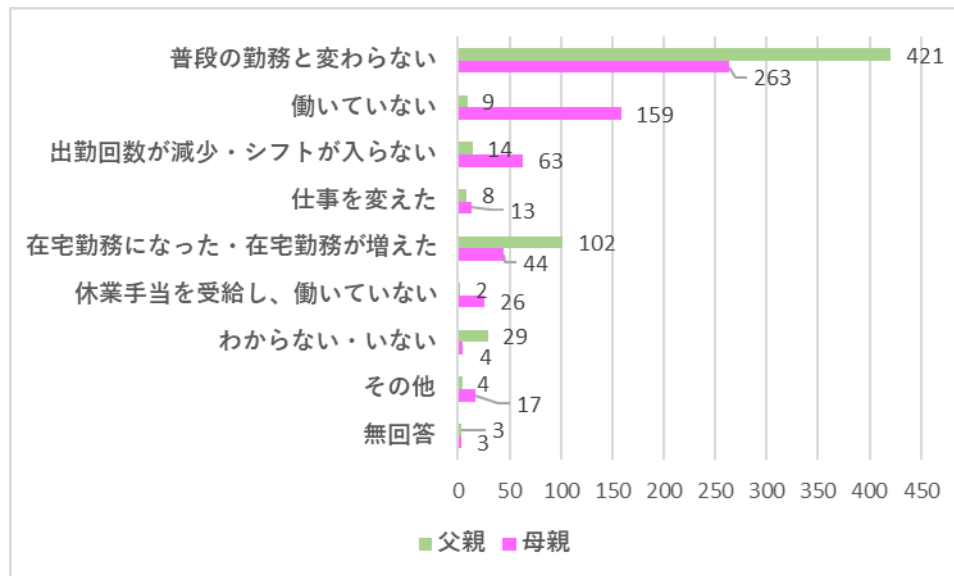
図表 7 休みの取りやすさ

	母親	父親
無回答・非該当	117	51
どちらともいえない	98	234
休みをとりやすい	349	167
休みを取りにくい	28	140

2) 自粛期間中の働き方・収入の変化

自粛期間中の働き方の変化をみると、父親は「普段の勤務と変わらない」が421名(80.7%)で最も多い。母親も「普段の勤務と変わらない」が263名(49.7%)で最も多い。この母親の回答の中には、専業主婦の回答も含まれていたため、注意が必要である。また、母親は自粛期間中に働いていない割合が父親よりも高い。パートやアルバイトの母親が働いていない場合も含まれていた。

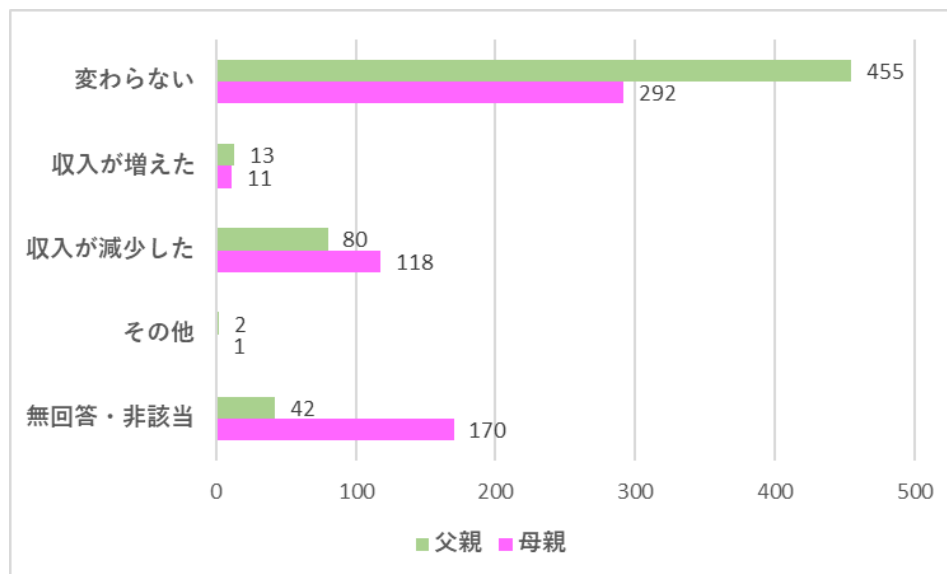
図表8 自粛期間中の働き方の変化



自粛期間中の収入の変化(図表9)をみると、父親と母親どちらも「変わらない」が最も多い。特に、父親に関しては約9割、母親に関しては約半数が変化していない状況が読み取れる。

一方で、母親に関しては「収入が減少した」が170名(32.1%)である。

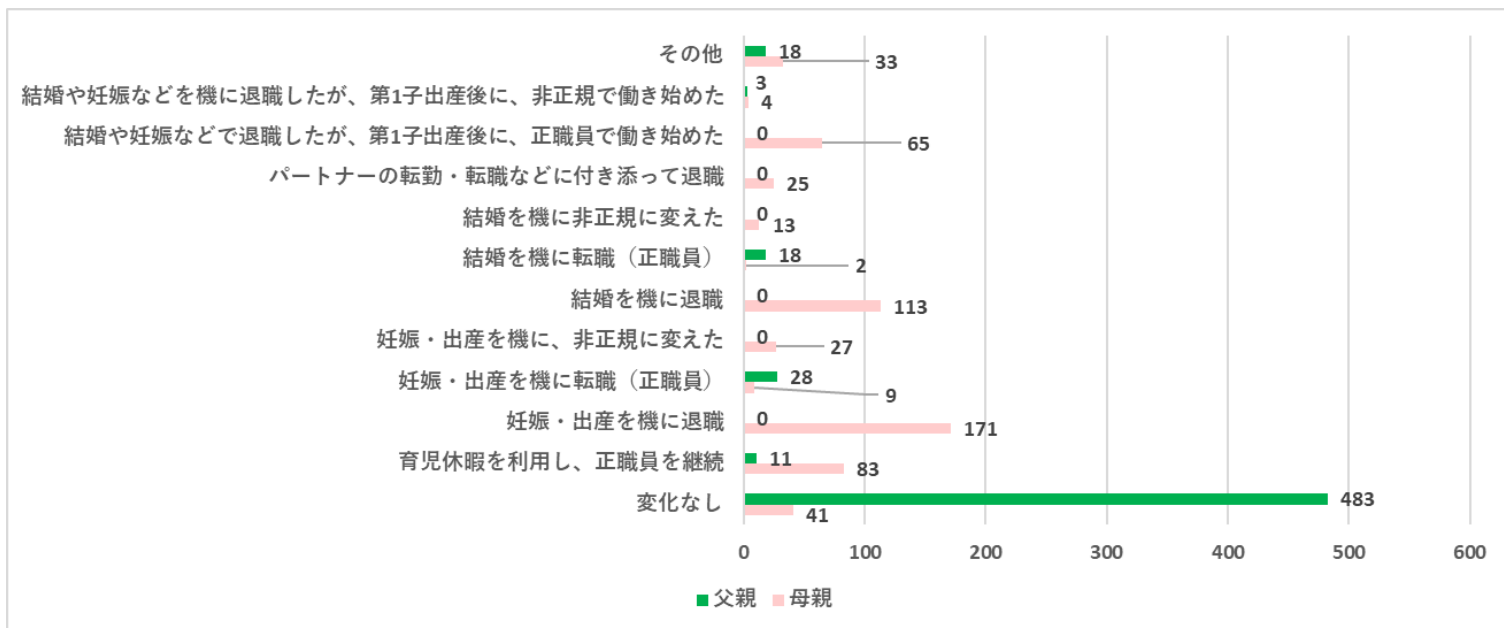
図表9 自粛期間中の収入の変化



3) 結婚・妊娠・出産等による仕事の変化

次に、結婚・妊娠・出産等による仕事の変化を整理していく(図表10)。結婚・妊娠・出産などのライフイベントにおける仕事の継続性は、男女で異なっている。父親の約9割が「変化なし」である。特に、父親は結婚や妊娠などを機に退職を経験した人はいない。また、育児休暇を利用した男性の割合が極めて少ない。しかし、母親の約半数が結婚・妊娠・出産、パートナーの転勤などで退職を経験している。

図表 10 結婚・妊娠・出産等による仕事の変化

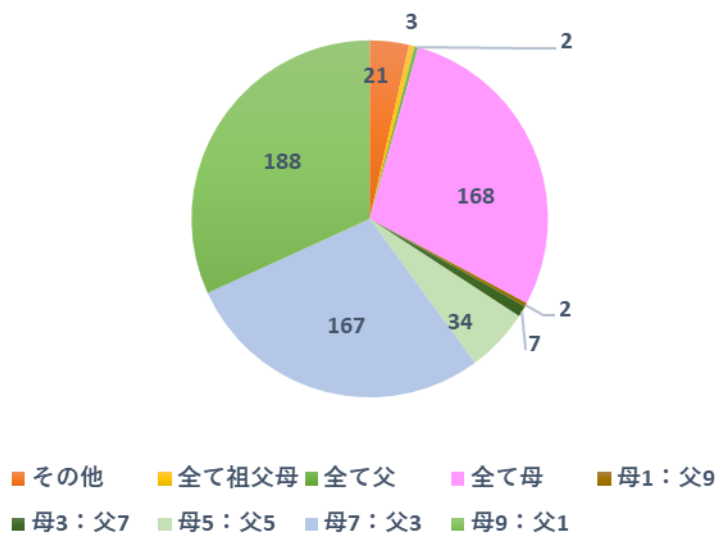


(4) ケアとサポート

1) ケアの配分

ここでは、「普段、掃除・洗濯・食事の支度、ゴミ捨てなどの家事はどのように行っていますか」で得られた結果を整理していく(図表 11)。家事は、「母 9 : 父 1」や「全て母」「母 7 : 父 3」のように、母親が中心的に担っている傾向がある。

図表 11 ケアの配分 N=592



2) 家事や育児のサポート

図表 12 のように、家事と育児のサポートについては祖父母、実家からのサポートに依拠している。家事に関しては 47.3%、育児に関しては 24.6%の家族が誰からもサポートを得られていない。

図表 12 家事や育児のサポート

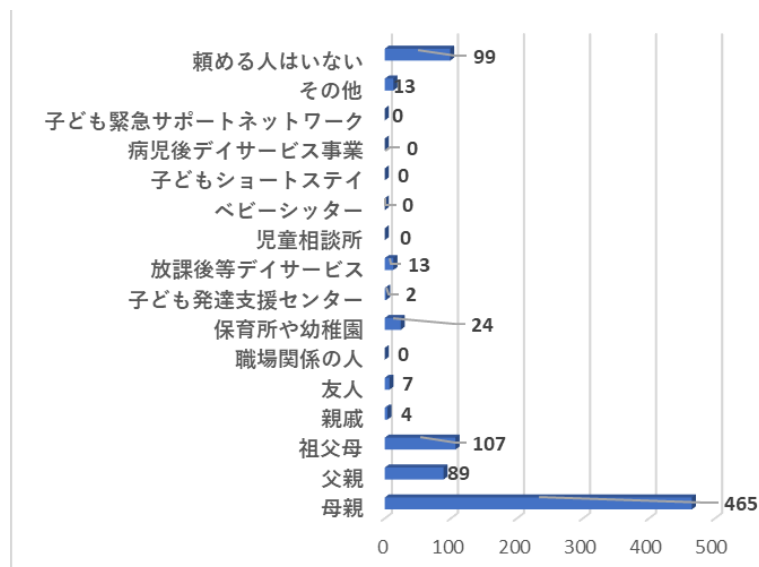
	家事	育児
祖父母	301	419
親のきょうだい	50	95
親戚	9	16
友人	23	44
職場関係の人	1	0
その他	38	17
いない	250	130

3) 自粛期間中のサポート

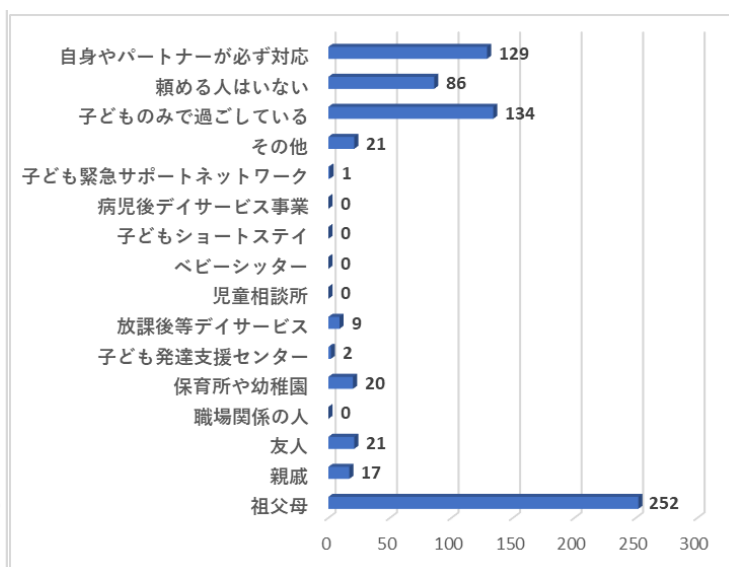
図表 14 で整理したように、「自粛期間中や学校等が休校の間、日中にどなたがお子さんを見ましたか」で得られた内容について整理していく。その結果、「母親」が約 9 割を占めていた。これは、非正規の割合が高いことや働き方に関係している。休みがとりやすい働き方をしていた母親のほうが日中に家にいることが出来ていたと推察できる。一方で公的なサービスの利用は少ない。

次に、「自粛期間中に、ご自身やパートナーが子どもを見ることが出来ないときに、どなたに世話を頼みますか」という設問で得られた結果を整理しておく。「祖父母」が 252 名 (47.6%) で最も多い。次いで「子どものみで過ごしている」という回答が 134 名 (25.3%) で高い。「自身やパートナーが必ず対応」や「頼める人はいない」を勘案すると、緊急時に自身やパートナー以外に頼れる人がいない家族が約 4 割を占めている。

図表 14 休校・休園の間、日中に子どもを見た人(複数回答)



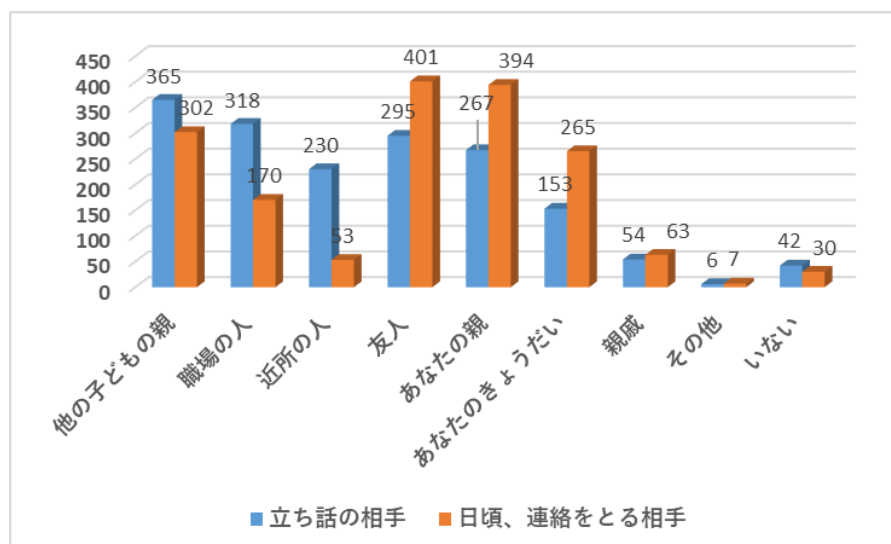
図表 15 自粛期間中のサポート (複数回答)



(5) 社会関係

ここでは、①日頃立ち話をするような付き合いのある人、②日頃、気軽に電話や LINE、メールなどで連絡を取り合う人、③悩みと相談相手について結果を整理していく。

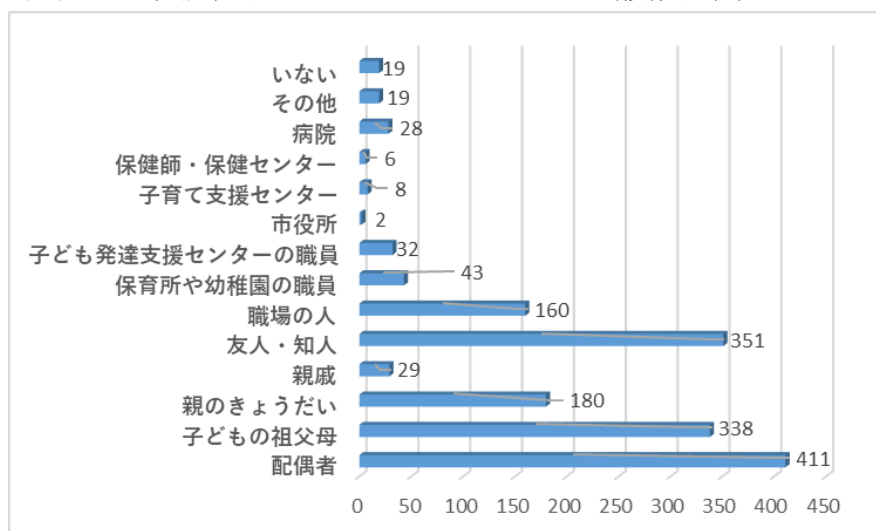
図表 16 立ち話をする相手と日頃連絡をとる相手（複数回答）



立ち話をする相手(図表 16)をみると、「他の子どもの親」が 365 名(69.9%)で最も多い。次いで、「職場の人」が 318 名(60.9%)である。一方で、日頃、気軽に連絡をとる相手(図表 15)は、「友人」が 401 名(76.8%)、「親」が 394 名(75.5%)「他の子どもの親」が 302 名(57.9%)である。

相談相手(図表 17)をみると、「配偶者」が 411 名(69.4%)で最も多い。次いで、「友人・知人」が 351 名(67.2%)である。

図表 17 相談相手（複数回答）



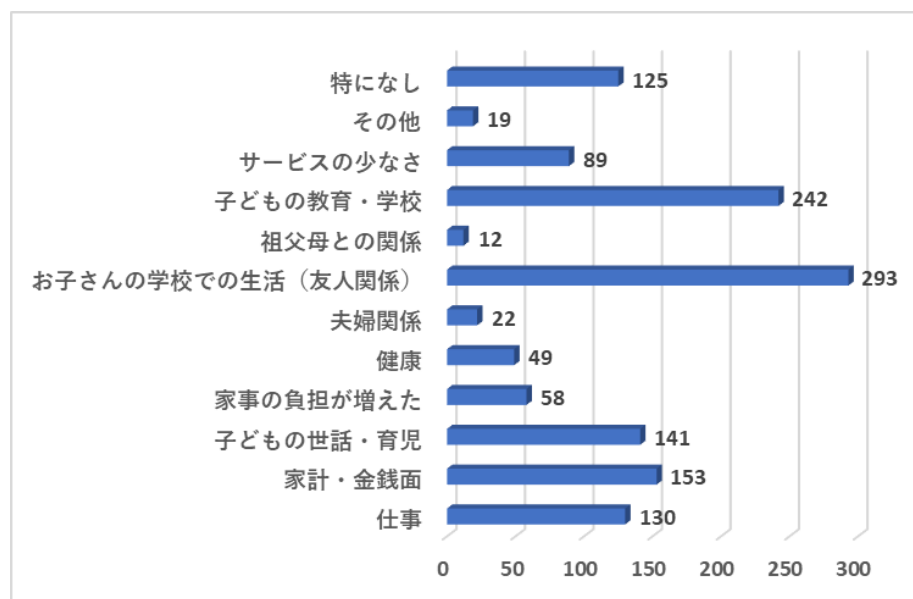
このように、公的な機関に相談するよりは、気心が知れて、気軽に相談できる親族や友人などの本人がもつ関係性に依拠していることが読みとれる。

(6) 小学校に入学してからの不安や悩みと担任への相談のしやすさ

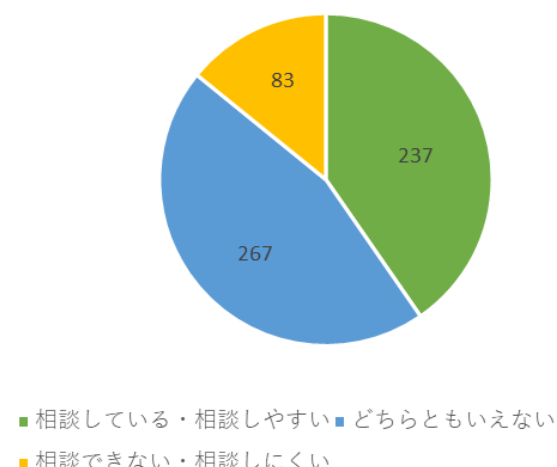
小学校に入学してからの不安や悩みは、「学校での生活（友人関係）」が 293 名(49.5%)で最も多い。次いで、「子どもの教育・学校」が 242 名(40.9%)、「家計・金銭面」が 153 名(25.8%)である。「その他」には、下記のような回答があった。例えば、「高学年まで預けられる学童保育がない」、「学童まで学校から歩いて 30 分かかる場所で非常に不安や不便である」、「学童の費用が高い」、「放課後に安心して預けられる児童館がない」、「小学校 4 年生から医療費の負担が 3 割になるため治療の継続について不安」、「学級担任の対応・担任の対応が悪い」、「担任の言葉が子どもの心を傷つけた」、「スマホを持っている生徒同士のグループラインの内容・他の生徒の言葉や相手に与える影響について」、「子育てに対するサービスの悪さ」、「幼児期は相談できる場所が多いが、小学生の親は学校以外にどこに悩みを相談してよいのかがわかりにくい。不登校ならここに相談可能、発達のことならここに相談できるとわかりやすくしてほしい」、「PTA」、「通級や放課後デイサービスで疲弊する子どもへのケア、学校との対応、仕事の継続のしんどさ」、「不登校」などの回答があった。

不安を担任に相談しているかについては「どちらともいえない」が半数近くを占めていた。

図表 小学校に入学してからの不安・悩み(複数回答)



図表 担任への相談のしやすさ



(7) 現在利用している学童保育や小学校への意見や要望

主に、①小学校の建物にかんする要望、②学童保育、③教育のありかた、④制度に関するものなどがあつた。ここでは、いくつか記載する。

1) 意見

- ・参観日や入学式といった行事に車で行けない。車で行ったら文句を言われる。学校近隣ならまだしも、学校⇄家は徒歩 30 分。冬ならもっとかかる。大人だけなら良いが、1 歳児を抱っこして 30 分は辛すぎる。改善してほしい。
- ・3 年生から学童が待機になり、仕事が終わるまで子供が一人で過ごすことに不安を感じている。学童の受け入れ人数が少ない、安心して働けない。優先順位などつけず、働いている親の子供がみんな学童に入れたら一人でいた事による事故や不安や心配はなくなるのにとおもいます。高くてもいいから子供が安全な場所にいてほしいと思っている親は沢山いると思います。
- ・毎週末、タブレット PC を持ち帰って来るが、重すぎて子供の負担になっている。授業でも活用されているのか。
- ・小学校の近くに学童がないのがどうかと思う。なぜ学校とは全く違う方へ向かわなくてはならないのか。せめて学校から 10 分圏内にあると助かる
- ・休校になった際の学習時間の補填が少なく感じたのもう少し力を入れて欲しい。また、自粛期間中に遅れた学習へのサポートは全くなく、いまだに子供がその時期の学習を深く理解していないのが不安
- ・学童保育を長期休みのみ利用していますが、学童が学校から 20 分以上歩く場所にあるため、特に冬道や視界の悪い日は危険が多く大変です。
- ・学校の先生方は熱心に子供達と向き合ってくれ、一人一人の良さを認めて伸ばしてくれていると思います。個人差がある勉強の遅れにも対応してくれ、補習も受けることができます。
- ・学校は勉強で運動ができないぶん、外遊びやカラダを使う活動を積極的にしてもらえるとありがたいです。
- ・学童が 2 年生までしか入れないので、子どもだけで、留守番している家庭がたくさんいると思う。何か事件がおきてから江別市は対策をするんだろうと思う。事件が起きてからでは遅いと思う。

- ・子どものきょうだいがコロナ中に自宅待機でオンライン授業をしてもらったが、たった1時間の授業だけだった。パソコンを持って帰らせて意味とは何？と思いました。案の定、授業に少し遅れました。
- ・連絡網がなくなった為、子供が遊びに行つて顔見知りじゃない親の連絡先が知りたいときに連絡がとれないので連絡をとれる手段がほしい。
- ・毎週金曜に学校から借りているノートパソコンを持ち帰ります。(月曜にまた持っていきます。) 荷物がかなり重すぎるので教科書を置いてくるなどしたい。札幌では、友人の子の小学校では教科書を学校に置けるようにして負担を減らしているため、江別もそうしてほしい。
- ・低学年のうちは特にもっと放課後に居場所があると嬉しい。学校開放とかもあると助かる
- ・幼稚園は延長保育を使えるのに、小学生の学童の定員が少なすぎる。年度途中の転勤族だと学童サービスがどこも定員いっぱいでは利用できず、母親の就業に影響が出ている。場所も自宅から遠い所が多く、迎えに行くことを考えると小学校併設で作られたら利用しやすくなる。(以前住んでいた市では併設で年単位、月単位、突発的でも利用でき、親が迎えに行けない時は事前登録でタクシー帰宅もできた)
- ・学童保育がなさすぎて、働いているがセーブしたり、このままでは辞める決断になる。
- ・子供がどうやってテストに取り組んでいたりするか、肝心なところの詳細が知りたい。
- ・小学校が古くて水回りが汚いと子供が言っている。
- ・小学校ではコロナ対策もしっかりしていて、行事もなるべく出来るように配慮してくれている。子供の休みが続いた時も連絡をくれて、休んだ分の勉強も個別で指導してくれるのでとても助かっている。
- ・学童を定員いっぱいだからとだされた。働ける環境が整っていない。学童保育が高すぎる
- ・子供が学校でどのように過ごしているのか、伝わらない。学校で担任以外の先生とも個人的に関われるような環境だと良い。1学級1担任制ではなく、複数の先生でみれるようにし、複数の先生に質問や相談できる方が良い
- ・担任の先生のやる気の差があまりにも大き過ぎるのを実感しています。校長、教頭の差もかなりある。正直、先生によってハズレ、当たりを感じてしまいます。
- ・小さな地域なので、地域全体で子供を見守るという意識でもっと連携していただきたい
- ・学童が小学校から歩いていかなければならず、小学校の中にあると助かります。札幌市から転入してきましたが、札幌で通った小学校は児童館が小学校のなかにあり、料金も延長時間などなければ無料で利用できたため経済的にも助かりました。
- ・休校の間の学習の補填がなされなかった。教育の質が保障されていないと感じる。普段も子どもにどのような授業をしているのか心配。
- ・学童希望者が多く、3年になったら入ることができない。3年になる4月から夏休みなどの長期休み不安。
- ・学童が非正規の親には使いづらい。札幌市の児童館？のように無料で自由に行ける所が増えてほしい。夏休みなど長期休みは預けられる所がなく困っています。
- ・学童は定員オーバーで出されてしまうが、札幌のように登録して遊びに行けるところがあると良かったです。また保育園は7時まで預けられたが、学童は6時ころまでだったような気がする。なので同じくらいまで預けられると良い。
- ・もっと親も子も相談しやすい環境にして欲しい。相談したくてもできない人もいるから、声をかけて欲しい。特に子どもには。
- ・今の教頭先生が上から目線で感じ悪い。子どもに対しての扱いも酷いようだ。
- ・小学校では通級指導教室に通っています。札幌の小学校では通級教室はなかったので、江別では手厚くサポートしていただき、また担任と通級指導の連携もしっかりしていて、子どもに寄り添って指導していただいています。
- ・給食費の無料化にしてほしい。学童欠席時の金額を返却してほしい

学区内の学童保育の場所が小学校や自宅から遠いため冬道の悪天候のなかの下校などを考えると通わせられないと思い、仕事復帰を先延ばししている。

追加料金があっても学童までのバス利用などがあれば学区内外の学童の選択肢が増えるためありがたい。

- ・子どもが通う小学校がとても古く、耐震構造など不安に思う点が多い。雨漏りもしているとのことなので建て替えなどの対応をしてほしい。小学校だけではなく、江別市は中学校も古い所が多く感じる。
- ・小学校の体制が昔のほぼ変わっていないことに驚きました。不登校の子供たちが教室以外に行ける場所がないことです。スポットケアはありますが、実情としてほとんど中学生しかいません。小学生のなかにも色んな理由で学校、教室に行くことが困難な子供たちがいます。私の子供もそうでした。教室に行けない子供は自宅しか選択肢がありません。子供には学ぶ権利があるにも関わらず、学べる場所が学校にはなくなってしまうのです。これは、昭和の小学校と同じで何も変わっていません。札幌やその他の自治体では、小学校にも別室教室が用意されており、ちゃんと先生もついてくれて、学ぶ場所を確保してくれているところもあるようですが江別市はそのような先生を確保できないということで、結局不登校児童は自宅しかないのです。全ての子供たちに平等に学べる場所を提供できるように、もっとこういうところを真剣に考えていただきたいです。
- ・今通っている小学校に女子の少年団を作って欲しかった。それと新築地区が増えたのにもっと早くに学童保育、ミニ児童館を作って欲しかった。
- ・小学校はまだ子供に十分な説明がなされないまま、頭ごなしに叱ったり、やることを強要している場面が見受けられます。きちんと、子供の立場に立った話し方、説明の仕方がなされれば良いと思います。

(8)市への要望

- ・学童保育を増やして欲しい。
- ・小学生の預け先が少ない。札幌の学校のように学校の中であったり、学校から10分圏内に学童が欲しい
- ・子育てサポートは、子供がまだ、小さい時期に必要と考えることが多いが、金銭面では子供が小さいうちより、高校入学から大学に在籍しているときの方が親の負担は大きいように思う。そのため、学生がいる家庭への支援等を考えてほしい。
- ・医療費の通院分で小4から実費になるのはキツイ。他の市区町村は小学生以下無料や前移住地は中学生以下無料で、とても手厚かったので子どもにかかる医療費に関しては江別に来て残念な部分です。
- ・保育園に入園するのが難しいときがあり（順番待ち）、待機児童の解消や、保育システムのある企業を増やす流れを作ったりなど、江別市や北海道でできることをしてほしいと思っています。
- ・医療費を18歳まで無料にしてほしい
- ・学童保育の金額を減少させてもらいたい
- ・苦手な科目の補習授業をシニア世代（元教師）や現役学生（教員を目指す人）にお金を払ってでもいいから、サポートしてもらいたい。
- ・大学や私立高校の進学に際し奨学金制度を重視させて欲しい。
- ・気軽に利用出来る学童みたいなものはあったらいいなと思います。いつもは利用しませんが、今日だけ頼みたいということがあります。小学生の預け先・見てくれる人が必要
- ・金銭面で援助をしていただけると助かります。図書券は非常にありがたかったです。
- ・病児保育を各保育園に併設すると良いと思う。体調不良な上に慣れない病児保育を利用し、子供に負担がかかった為。子供の体調不良で休むのはいつも母親になる

- ・学校に併設した学童保育があると便利。札幌市のように放課後誰でも行ける学童のような制度を江別にも設立して欲しいとおもった。
- ・高校卒業までは、どのような家庭でも子供が望む学習やスポーツ、療育等が十分に受けられる社会が理想だと思う。社会や家庭の変化により、朝も放課後も鍵っ子がとても多い。
- ・電気代や燃料代や食材費が値上げしているので、子供が健康でいられるよう食材購入、調理の金銭面が加算しているから食材購入や燃料のサポートがあると助かります。
- ・まずは今国会で話題にもなっているとおり、子育てに関する支援はすべて所得制限は撤廃していただきたいです。我が家は子どもが3人おり、一番下の子はまだ幼稚園入園前ですが、私が育児を担っているため、保育園には入っていません。将来の教育費のために仕事はしたくとも保育園への優先順位は低く、また入れたとしても保育料は最高額です。
- ・病児保育を充実してほしい。あづまクリニックがあり助かっているがそこだけなのでもしやめたら困ることになる。
- ・夕飯のサポート。フルタイムだと夜7時前に家に帰り、夕飯の支度、子どもの学習のサポート、その他の家事などで親子とも寝不足になっている。平日の時間がとにかく足りない。外食には抵抗があるが安心できる素材のお惣菜など夕飯作りの負担が減ると助かる。
- ・ファミリーサポートなど。どうしても仕事が抜けられない時の習い事の送迎や、夜の父母会の際の子どもの預け先など、祖父母のかわりのようなサポートがあると助かる。定期ではなく不定期でも利用しやすいものがよい。
- ・学童保育の充実。2年生で卒業、などの暗黙のルール陰に困っている親もいる。安心して放課後を過ごせる居場所がどの校区にもあってほしい。
- ・中高生の居場所。子どもが中高生になったとき、家庭でも学校でもないが安心して立ち寄れる居場所があると良い。親もどこで遊んでいるのかわからないよりはそこにいる、と思えると安心できる。
- ・コロナの休校や学級閉鎖など専業主婦が家にいる前提とすることが多い。(学級閉鎖が当日決まると昼までにお迎えに来るよう学校から連絡が来る、など。)フルタイムの共働きもいるという視点で施策を立ててもらえるとありがたい。
- ・声がけや追いかけなどの事件が気になるので、何かあった際に、子どもが駆け込めるお家が増えるとありがたい。
- ・朝の通学時、夕方の下校や公園の見回りがあると子どもを1人で出しやすい。
- ・学童保育や保育園を充実させること。子供が体調不良などのとき、子供のために仕事を休める環境を職場で作れるようにすること。今や、共働きは当たり前です。ウチは母子家庭ですが、祖父母がいるので何とかなっていますが子育てしやすい環境がなければ、出産をためらう家庭も多いと思います。ベビーシッターや子育て支援も、ただ利用を働きかけるだけでなく、お試し体験などの場があった方が、いざという時頼りにできると思います。民間レベルで出来ない環境整備をしてくれることを望みます。
- ・小学校入学と同時に転勤が急に決まったので何も情報が得られず、結果なんのサポートを受けられなかった。日曜日にしか町の下見に来られなかった。今でも学童保育がどこにあるのか、どこで情報が得られるのかわからない。
- ・子供の野外での遊び場の充実。夜勤をしている家庭のサポートも欲しいです。
- ・江別は子供が多いので、公園や、中で遊べる施設をどんどん作ってほしいです！
- ・冬季は家に籠りがちになるので、子供向けの体を動かすイベントなどを学校でやってほしい。
- ・スキーのレンタル！年に3回しか使わないのに購入するのに抵抗あります。持ち帰りも大変なので、全員基本レンタルにしてほしいです。経済的な負担を軽減してほしい
- ・低学年の時、下の子の長期入院で子どもを見られないときの預け先がなく、困ったことがあります。ファミサポは一日の中で一人の方に見続けてもらうことができず、かわいそうに思いやめました。学童もだめでした。

- ・父子家庭は母子家庭より収入が多いこともあり、ある意味、金銭的援助が薄い。父子家庭は目に見えない支出があるので少し援助があれば助かります。
- ・子どもの医療費の支援が江別はずいぶん手薄だと思う。中学生・高校生活まで拡充してほしい。
- ・子供医療費無料化、教育費助成金、入学お祝い金等。子供持つ家庭に子供一人当たり年間 50 万円位貰えると出生率も増えると思う。
- ・札幌や札幌近郊みたいに早く有料の予防接種を無償化してほしい。
- ・江別に限らずだが、小学生の居場所がないように感じる。公園ももちろんだが、放課後に気軽に安心して行け何か学べる場があれば良いと思う。
- ・高学年も学童保育を利用できるようにしてほしい。札幌では学童保育も無料で、小学校の学区ごとに児童会館等があり、放課後の児童の居場所が確保されていた。
- ・共働き家庭が増えたのとコロナ禍もあり友達と家の中で遊ぶ事がなくなったので、夏場は公園で遊べるが冬場は遊び場所がない。江別は未就学児のサポートは頑張っていると思うが、小学生のサポートはまだまだ不足していると思う。
- ・働く両親への負担軽減。仕事が終わってからの宿題の丸つけが大変です。寝るまでにやる事が多くて子供とゆっくりする時間がありません
- ・緊急時に頼れる人がいないので、家事や子どもの世話を頼めるサービスを充実させてほしい。
- ・相談に乗ってくる人が必要。話を聞いてもらえないのは孤独すぎる。

Ⅲ. 調査のまとめ

小学校調査を通じて、明らかになったことは以下の4点である。

第1に、小学校調査においても、結婚・妊娠・出産などのライフイベントにおいて、仕事の継続性が男女で異なる。男性は「変化なし」が約9割である一方で、女性の半数が離職を経験している。特に、男性が育児休暇を取得したケースが極めて少ない。

第2に、父親は正職員が9割を占めているが、母親の約半数が非正規であり、年収も扶養の範囲内で働く人が多い。

第3に、母親がケア役割を中心的に果たしている傾向がある。労働時間が長く、家にいる時間が少ないと、ケア役割を担う割合は少なく、パートナー（多くの場合、母親）がケアを中心的に行っている傾向がみられた。

第4に、サポートは主に親族によるものに依拠されていた。自粛期間中は、母親の約半数が働いておらず、ケアを中心的に行っていた。コロナ禍で、自粛期間中・休校の間、日中誰が子どもを見ていたかについては、約9割が「母親」である。これは普段から非正規や専業主婦が多いことに加え、自粛期間中は約半数が働いていない状態がみられたことと関係する。また、自粛期間中は総じて、「サポート」の割合が減少傾向を示していた。特に、自粛期間中においては、約4割の人が自身やパートナー以外に頼れる人が誰もいない状況であった。つまり、本調査においても、「サポート」は「祖父母」、すなわち実家からのサポートに依拠していた。特に、地域の特性として、利用できる学童保育が限られていることや急遽子どもを見てくれる人が必要になった時に預けることができない状態、すなわち自身やパートナー以外で頼れる人がいない・急な預け先が無い状態では、家族の中でケアの担い手が必要となり、普段に家にいる時間が長い母親が働く時間を削り、中心的にケア役割を担う構造を生み出していた。就学前と異なり、子どもの年齢が大きくなれば子ども自身で過ごすことも可能であるが、子ども一人での危険や経験の違い、保護者による宿題の採点などもあり、親の就労と家庭での時間の調整の負担、時間や教育費の負担などが家族に委ねられがちである。子どもの年齢に伴い、支援を縮小していくのではなく、就学してからサポートが必要である。

以上のことから、ケア・仕事・サポートに着目すると、子どもの放課後の過ごし方・見てくれる場所が確保できない状態や急な預け先がなく、サポートが希薄化していること、家族の中で家

事や育児などのケア役割が母親に偏在化していること等が複合的に重なることで、より女性の非正規雇用化や専業主婦化につながっている。ケア役割や稼得役割が誰かに偏在化する状況は、世帯として十分な収入があれば、家族形態の一つとして潜在化するが、自身の生活を維持するための収入が無いのは貧困のリスクに繋がる。特に、結婚・妊娠・出産・パートナーの転勤などのライフイベントで離職や非正規雇用化し、その後もケア役割を中心に行うことで稼得を得る機会にアクセスしにくい状態は、現在、社会現象となっている高齢期の貧困にも深く関連する。特に高齢女性の高い貧困率の背景には、現役世代の働き方が深く関係していることがすでに明らかにされている。つまり、現役世代にどのような働き方をしたのかによって、年金や将来の生活の安定性にもつながるため、緊急時に、家族で調整し、対応可能であるという家族を含み資産として捉えるのではなく、家族内外で利用できる資源の確保や仕事を継続できる道筋および再就職支援の在り方なども検討していく必要があるだろう。これらは今後の課題として取り組んでいく。

謝辞

本研究にご協力いただいたご家族の皆様にご心より感謝申し上げます。皆様からいただいた率直な声はとても勉強になります。また、江別市役所企画課の皆さま、子ども育成課、子育て支援課の皆さまをはじめ、江別市役所の職員の皆様、関係機関の施設長ならびに職員の皆様、北翔大学総務課の鈴木様、調査に関わった全ての方に、心より感謝申し上げます。

今回、紙面の関係で記載できなかった内容については、別途報告させていただきます。今後も皆様のお知恵やお力をお借りしながら、江別市ないし北海道が少しでも子育てしやすい地域になっていくように教育と研究に精進していきますので、今後とも、なにとぞ、よろしくお願いいたします。